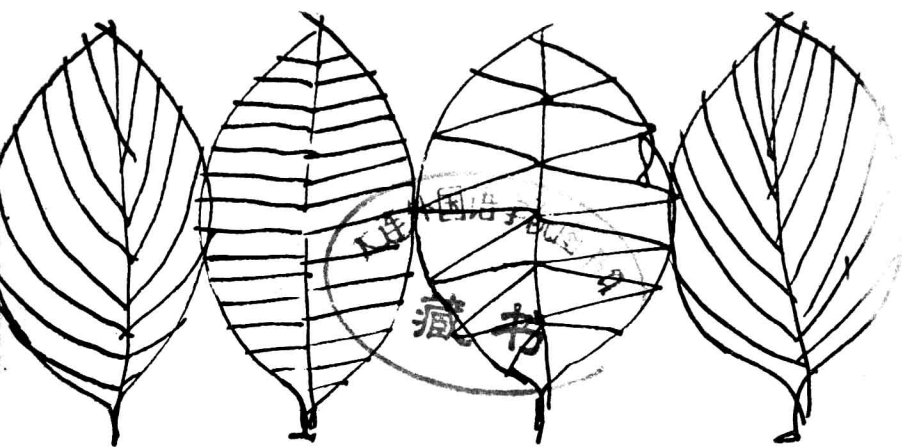


霧の部落



きだみのる

霧の部落



筑摩書房

霧の部落

昭和二十八年九月二十五日印刷
昭和二十八年九月三十日発行

定価 二九〇円
地方売価 三〇〇円

著者 さだ・みのる

発行者 古田 晁
東京都文京区台町九

印刷者 磯島 栄次郎
東京都墨田区吾妻橋二ノ一五

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都文京区台町九
電話小石川 二〇〇五
振替東京 一六五七六八

霧
の
部
落
目
次

ウサギ狩り
：
：
：
：
：
：
：
：
：
七

蓄音器和尙始末
：
：
：
：
：
：
：
：
：
一七

田園の心理
：
：
：
：
：
：
：
：
：
三

部落と一本の樫
：
：
：
：
：
：
：
：
：
二三

あとがき
：
：
：
：
：
：
：
：
：
二五

装
幀

吉田健男

霧の部落

Histoire de nulle part et de partout.
この話でもないが到るところの話

一

舗装された村の本街道からトラックのやつと通れる支道が山峡に入っている。部落は日蔭側の最初の澤の傾斜に見出される。平原と山塊の接点にあたる此處は霧の多い個所で、平地の農民たちは嶺から霧が下りてこの部落を包むと雨の來ることを知り、そして霧に隠れた家々が浮び出しはじめると、もうお天氣は決つたと思うのである。

そのような霧の深い傾斜で、親方二軒、中産五軒、日よう取七軒の部落の十四軒は變化のない平凡な寒村の生活を送っている。家数が少ないので、それは部落というよりも、退屈な大家族のようである。姉さんが親方の木崎又一の母親を、兄にいさんが同じく親方の野村信介を、坊ちやんが信介の幼い獨り息子を指す等部落の言葉の使い方もこの印象を強める。濕氣で焦立つ人々の感情は大きな

家族の内部で見られるような畦み合い、蔭口、虚言を撒き散らすのだ。

生れて始めて外へ出て、しかも進駐軍に働くようになった中年の庄一は仕事に慣れはじめると部落への歸り途で好く人に云う。

——部落へ歸るのは、どう云うものか、氣が重くてならねえ。あちらさんとき合っている方がどれだけ氣が樂だか知れはしねえ。アメさんの仕事をしたら日本人とつき合う氣にはなれねえよ。

この律氣な電氣職工が日本人と呼んでいるのは勿論部落人のことだ。彼は部落のどんな寄り合にも顔を出さず、茶飲みに行くのは部落に籍のない寺の疎開の所だけである。彼は部落人からの逃避者だ。しかし眞實は、これほど明瞭な形では示されないが、他の部落人たちも大なり小なりの程度に彼等が宿命的に縛りつけられている部落の生活と部落人に飽きているのだ。彼等は部落を圍む山陵の彼方を眺めて嘆息する。

——こんな吝な住み難い部落はあるもんじやあね。蔭口と我慾と嘘しかねえ。おらあ何處かもつと仲の好え部落に出て行きてえよ。

祖父もそう云つたし父もそう嘆いたし、孫もそうこぼすであらう。だが祖父も父も代々出て行く代りに言葉で慰め合つて留つて來ているのである。

——何處に行つても同じだんべえよ。

この倦怠は部落の者が互に他の過去を知り切り、知られ來つており、部落の記憶は忘れることを知らないというところから來ているに違いない。

さてこの年、部落のクロニクルは幾つかの事件を記している。

酒煙草等日用雜貨を商う村議三造の娘は町の機屋で働いていたが、正月の中旬、晝休みのピンボンの最中、突然氣持が悪いと云つて横になるとその儘息が絶えた。間に合わなかつた醫者は脊髄の異變と推定して診斷書を書いた。それまで獵氣違ひであつた三造は、村人達や女房のお鹿が、こんなことになつたのも三造が狐や狸や鬼を取り歩いた殺生の報である云うのを聞くと、暫くの間それを氣にして獵にも出ず、神妙に家につぐんでいた。

一月の終りには甘酒屋の老爺が中風で死んだ。

二月の始め木崎又一の弟で未だ部屋住みの寛次は自己所有のトラックを運轉中誤つて村人を彈ね飛ばした。被害者は町の病院に救急車で運ばれた。入院費と慰藉料が問題になつたとき、一林賣れば百萬圓という個所を幾つも持つてゐる又一は云つた。

——寛次のやつた失敗だから、寛次が始末をつけたら好かんべえ。奴は錢なんざあ持つちやあいねえから、監獄なり何處なり行つてよ。うらあ一文だつて錢は出さねえよ。

最後に祖母や母親の言葉で、彼は一萬圓だけ出すことにした。仲介に立つた村議で雜貨屋の川端信六は病院とかけ合い治療費二萬二千圓を一萬圓に負けて貰ひ、慰藉料なしの被害者をその貧しい自宅に連れて歸つた。

二月の終りには部落外しの鐵次の幼い娘が風邪から腹膜炎を起して死んだ。鐵次は部落に葬儀の手傳いを頼んだが、良介、又一の兩親方と親方補佐の三造は合議の上、この申し出を拒否した。それ故この娘の葬いは部落方の手傳いなしで、鐵次とその親類の手で行われた。夜、怒りと絶望に捉

えられた鐵次は寺に上つて來て必死の面持で疎開に訊ねた。

——良さんと俺とどっちが悪いと思うかよ。云つてくれろよ。

それから一日二日してまた大雪があつた。日蔭道では雪はそれぞれの部落^{むら}人の手で道端に掻き寄せられたまま凍つて、ずつと後まで白い縁を作つていた。日向道^{ひなたみち}では溶けた雪は夜のうちに凍つて水晶の棒のような霜柱になり、日が當ると再び溶けた。この支道は濕氣を好む杉の生えた山の間を六キロメートルも奥に續き高い杉山の裾で終つていた。切り出した杉を運び出すため、町からおつ飛ばして來るトラックは、歸りには車臺がギシギシ鳴るほど杉丸太をつんで戻つた。部落のお地藏さまの角のような急カーブではタイヤは道を抉つて泥を捏ね、積んだ荷の重さで車臺は大きくゆれた。小學校に通う子供たちは、行きには道が凍つてるので通るのに何の困難もなかつたが、歸りには泥の海を前にして杲然とし、杉山の中を歩いて行つた。最後にトラックが通るのに危険を感じるような箇所が方々に出來た。そこで村議たちは、賦役の慣習を利用して安上りの道普請を計画した山持ちや製材會社の慫慂で道普請の奉仕労働の音頭を取つた。霧の部落とその西北の沿道の舊横村六部落では各戸一人ずつ二日間出て貰うことになつた。普請は三月の中旬であつた。

仕事の始まる朝九時前に賦役に出る連中は采配振りの三造の店の前の柿の木の下に集まつた。三造はその中に六十を過ぎ腰もいくらか曲つたお爺の姿が交つているのを見て云つた。

——お爺よ。おめえは道普請に出るんじやあんめえ。

——それがよ。俺は庄さんの代理を頼まれて出て來たのよ。

三造は庄治がアメさんとき合つていと、部落^{むら}人たあつき合えねえと公言するのを憎んではい

たが、それよりも部落で利益に鋭い随一の評のある彼の女房が人の好い食しいお爺を甘言と飯でまめ込んで平生から只で働かせている上にこの代理に出して不參金を惜んだことに腹を立てた。

——駄目、駄目。きよの道普請には代理は駄目だよ。

——代理でいけねえこたあるめえ。

——おめえのような年寄りには役に立たねえよ。庄一が出られなかつたら、二百五十兩の不參金を出せばええじやあねえか。

——これを聞くとお爺は集まつた連中の方を向いて云つた。

——この新規の決定は部落に相談の上で決つたのかよ。

——懷手をしてつつ立つていたぼろ仕事著の代吉が何時もの癖のように口を尖らしてどもつた。

——そんなこたあねえよ。お爺い。

——それじやあ、三さん、これはおめえの獨り決めじや。俺あ代理で出てよかんべえ？

——そうはならねえ。後で飲む酒の金の出つ場がねえよ。

——そりや俺あ知らねえ。飲みてえ衆は自分の金で飲んだら好かんべえ。

——それは、お爺、おめえの我儘じや。

——何が我儘かよ、と爺はここで疳癪を起した。我儘はおめえよ。俺あ代理で出るだあ。

——物の解らねえ糞爺だなあ。

三造は呟くようにそう罵つてから、集まつた連中に仕事の持ち場を指圖した。お爺には何處とも云わなかつたので、彼は代吉と一緒に鉤を擔いでお地藏さまの曲り角に向つた。

——三造さんも無理よなあ。と代吉は老爺を慰めた。酒代を出すために勝手に部落の決定を變えるちうことがあるもんじやねえ。

——そうとも村會に皆で出してやつたのに自分で出た氣になつて偉がつているのが、可笑しいくれないのんだわ。俺らの小使えみてな役なんだがよなあ。

——そうとも。

食しさのうちに一生を過ごして來た二人はそんなことを話し合つて、地藏の角に著いた。ここから三方に擴がつている麥畑には空から雲雀がせわしない歌を降らしていた。觸れを受けなかつた部落外の鐵次が、そこで麥畑の籬い掛けを黙々とやつている孤獨な姿が見られた。

二日目の晝過ぎ一臺の小型運搬車が下から上つて來て、お地藏さまの曲り角で働いている人足たちの前で止つた。

——ご苦勞さん、と五十くらいの洋服の男が車から降りて聲をかけた。人足たちは道をならしていた鋏の手を休めてお辭儀をした。仕事の監督に來ていた三造は彼を見ると傍に寄つた。その男は三造とちよつと立ち話をし、金入れを出し、百圓札を何枚か抜き出して三造に渡した。二人がダクトサンの上に乗ると、車の走り出す前に三造は云つた。

——おい皆よ。この人は都會議員の阿部久さんつう俺の學友だよ。一杯飲めつて金を預かつたら三時にここで飲むべえ。それまでに仕事は済しておけよ。

阿部久議員はその後で皆に云つた。

——私は木崎君の親友の阿部久です。茶代りに一杯やつて下さい。皆さんのお骨折りには同情し

ます。この道は都道にすべきです。何かとこれからお世話になると思いますが宜敷く頼みます。

車は動き出した。人足たちは二人の遠ざかるのを見ていた。

——あの衆は此道は何處まで行くか知れねえが、と上部落から來た篤は云つた。何處でも同じことを云うべえなあ。

篤は三年前まで青年會に入つていたが、その當時から日蓮宗の活動的分派である靈友會に凝り固つて、同じ信仰に誘い込んだ何人かの青年と一緒に分派を作り、青年會の指導者である物持や金持の息子たちに拮抗していた。

——そうだんべえ。とお爺は云つた。選舉が近えから議員たちは忙しいわい。あの阿部久さんはえらあ金持だと云うぜ。

——じやあ三造さんも金の蔓を擲んだようなものだんべえ。

——それまじやあ俺は知らねえがな。

お爺はそう云うとまた鋤を動かしはじめた。

道普請は三時前に終つた。凹みは土で埋められ、その上に砂利が厚く撒かれた。それは石のローラーで壓し堅めはされなかつたが、杉丸太を積んだ重たいトラックがローラーの代りをするであらう。三造の家の前から本街道の入口までの間で仕事をしていた三十人ばかりの人足たちは赤い涎れ掛けをしたお地藏さまの曲り角に集まつた。後家のオセイとスギ婆は菓子やみかんや茶飲道具を運んで並べた。三造は一升瓶を兩手に一本ずつぶら下げてやつて來た。

——やあやあ、皆の衆よ。ご苦勞さんだつたよ。酒の飲めねえ衆はそつちでみかんや茶菓子を食

つてくれ。飲める衆はこつちへ來う。ほんの口よごしくれえだが飲んでくれ。各部落でも酒の用意はしてあるから、後は部落へ歸つてやるんだ。

二十人ばかりが茶碗を持つて三造の腰を下した芝草の廻りに集まつた。既に阿部久議員と一杯やつて來た三造は上機嫌だつた。

——菓子とみかんと酒一升は、と彼は大聲で云つた。阿部久さんの寄附よ、後の酒一升は俺の志だ。

人足の一人が云つた。

——三造さんよ。阿部久さんは今度の選舉にも立つだんべえ。

——立つともよ。きつと當選すらあ。當選したらこの道を都道にするように骨を折つて貰うだなあ。毎年毎年道普請の人足に狩り出されちや耐らねえよ。

——あんたも儲かるなあ。

——おめえらそんな吝な簡だからいけねえ。あれは俺の學校友達だしよ。それに俺あ選舉で錢を儲けようという汚ねえ氣持はねえ、千圓貰えば千五百兩使う性分だからよ。

部落の者たちは半疑の眼を見合わせた。篤が口を挟んだ。

——三さん今度の選舉にも出るのかよ。

——未だ解らねえ。

——出べえ。部落會が推薦したら。

——いや、俺の出る出ねえは、部落たあ關係はねえ。前の選舉のときには部落推せんだったが、

部落からは幾票も入つつちやあいねえ。それでいて部落が助けたんだと云つて、小使いのように追
い使われたんじや合うもんじやねえ。出るなら俺は今度は全村區だよ。部落の票は當になるもんじ
やあねえ。

三造の周圍で酒を飲んでいた者も、別の環を作つて茶を飲んでいた者も、特に霧の部落の人足た
ちは興味を以て、圓顔、しし鼻の三造の氣焰を聞いていた。河原のお爺と代吉とは三造が最後の言
葉を云つたとき、互に顔を見合わせた。元來が怒りも恨みも長續きしない性質の上に、三造の實家
の先代の作代に雇われて一人前になつたお爺は三造が赤坊のときから育つのを見て來ているので、
心の底には愛情を三造に感じていた。彼は低い聲で代吉に云つた。

——三造さんは選舉前せんぎふといふのに、あんな自慢べえこいて好えのかな。選舉に出ねえと決めたの
ならそれでも好えが。

そのとき三造は云つた。

——みんなよ。もう酒も茶菓子もなくなつたようだ。ここは解散するとしべえ。ここの部落の者
はこれから良介さんの家へ行つてくれ。あそこに食ひ物も十分に用意してあらあ。酒は俺と良介さ
んと疎開が一升ずつ出すことになつてゐるからよ。

お爺と代吉は鉢を擔いで皆の後から部落の方に歩いた。三造を頼まれ親分なこうど（仲人）に持つ助夫が
傍に寄つて來た。

——どうよ。代さん。三さんはきようは二升も酒を奢るちうが、大方今度も村會に出るつもりじ
やあんめえか。

——そりやあおめえ。名乗りを上げたけりや勝手に名乗りを上げべえ。だが當選するかしねえかは別よ。先刻みてえな偉^{えゐ}そうな口を利いちや誰だつて三さんに票を入れたくなくなつちまうよ。

——そうとも俺は氣障で聞いちやいられなかつたあ。

緣先に部落の人足たちが集まつたと見ると、座敷で三造や疎開と話していた良介は云つた。

——きようは皆さんご苦勞でした。何にもねえが一杯やつて下さい。酒は寺の疎開さんと三造さんと私が一升ずつ用意しましたから。座敷に上^{あが}られる方は遠慮なく上つて下さい。いやうす暗くなつたなあ。

食物を運んでいた女房のオミエが續き間になつて三つの部屋に電氣をつけた。

酒宴が始まつた。人足に出ている親方の又一は座敷に引き上げられて、良介の横に坐らせられた。酒が可なり進んだとき良介は云つた。

——きよう町への行き歸りに二カ所で失業救済の砂防工事を見て來たがよ。身の入らねえ仕事振りよ。遊びだな。あれで日給は二百四十圓、それも歸りには四十圓はちよぼいちに張り、その上酌を一杯ひつかけて戻るといふのだからなあ、村からも砂防には何人も出ているが、いまにあの氣風は村中に浸みてくると思うよ。困つた問題だよ。もつと眞面目に働かせるちうわけに行かねえものかなあ。

——おい、と三造は地方事務所に勤める青年の庄司浦三に聲をかけた。おめえは役所から毎日金を持ち出して土方に出面^{でづゐ}を拂つてゐるんだから、この返事はおめえの受け持だあ。